

## 北海道日高地方での アメリカコハクチョウ越冬記録

谷岡 隆

056-0006 静内郡静内町中野町2丁目6番38号

### はじめに

昭和62年11月6日、それまで見たこともない嘴が黒いアメリカコハクチョウの幼鳥1羽が、突然、静内川に姿を現わした。

当時、まだ野鳥観察を始めてまもなく、初心者でありアメリカコハクチョウどころかハクチョウについて何も分からなかった私に、以後、手を取り足を取りご指導とご鞭撻をいただいた松井先生へ、追悼版となる今号こそご恩返しに相応しいだろうと、つい延び延びになっていたアメリカコハクチョウの資料を整理、11シーズンにわたり静内川を基点として北海道日高地方で越冬したアメリカコハクチョウの概要を素人の域を脱し得ない、日記風のものであるがまとめてみた。

また、毎シーズン撮り続けた写真も相当数あるので嘴のパターン変化など、それを含めて再度まとめて発表したいと考えている。

### 1. 自然（地勢）

日高支庁は、北海道の中央西南部に位置し、東北は日高山脈によって十勝、上川両支庁管内に接し、西は沙流川以西の丘陵地を境として胆振支庁管内と接している。南は178kmにわたり太平洋に面し、河川流域の平坦地を除き、丘陵地の多い地域である。

地形は、大部分を日高山脈とその前山によって占められ、丘陵地を櫛歯状に横断し、太平洋に注ぐ河川流域に谷底平野が見られる。

河川は、一級河川は沙流川のみで二級河川は静内川、日高門別川、新冠川、三石川、元浦川、日高幌別川、様似川など22河川、総河川数は600余を数える。海岸線は、総延長178.4kmを有し、北海道全体の6.4%を占め昆布をはじめ、定着制の魚類、水産動物資源が豊かである。

### 2. 気象

海洋性気候のため、夏は涼しく、最高でも30度を越えることはまれ。逆に冬は暖かく、零下10度を下回することはあまりない。一年を通じて温暖であるため、北海道の伊豆と例えられるほど、穏やかな気象が特徴である。年間を通して降雨量も少なく、冬

の降雪量は、道内では極めて少ない地域に属する。

### 3. 日高地方のハクチョウ

#### (1) 生息（越冬）地

日高管内でのハクチョウの越冬地は、新冠川（新冠町）静内川（静内町）三石川（三石町）、元浦川（浦河町）、日高幌別川（浦河町）、様似川（様似町）えりも西海岸（えりも町）。この内、えりも西海岸以外は河川であり、越冬するのは殆どかオオハクチョウでコハクチョウはまれである。

管内9町の内、日高町、平取町、門別町を除く6町で越冬し、生息地する地域は全て太平洋沿岸部に限られている。これは、日高には天然の大きな湖や沼はなく生息可能な河川または、海岸が太平洋岸に位置していることによる。河川での生息地は、平成7年頃までは河口域に一局集中されていた。この事は河川の結氷と降雪等により、人工の給餌が市街地（河口）に位置している事と関係するものと考えられる。しかし、静内町では近年は温暖化が原因と思われるが、静内川の中流域から河口域にかけ分散して生息するようになり、採食も河川一辺倒から近郊の水田、牧草地へと拡大傾向にある。

#### (2) 生息（越冬）数

日高支庁管内で、最も越冬数が多いのが静内川で、次に多いのがえりも西海岸である。静内川での数が多いのは川が結氷しないことと、定期的ではないが多くの町民が提供する給餌が豊富であることなどの生息条件が整っていることに他ならない。

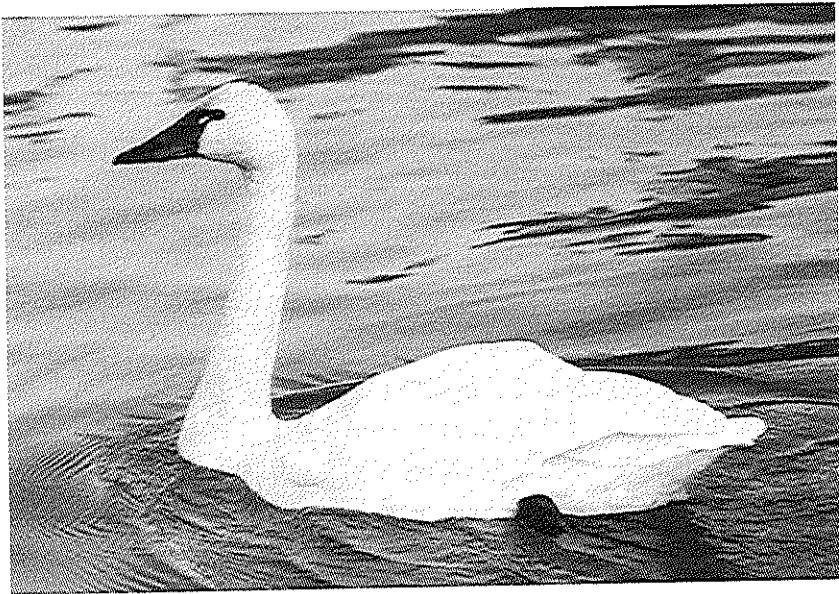


図1. 静内川のアメリカコハクチョウ(1996年10月27日)

### (3) 環境

河川の内、冬期間に結氷しないのは静内川だけで、他の河川は、12月～2月中旬頃までの厳寒期、大方が完全結氷してしまう。静内川も、数十年前は結氷していたが、近年の地球温暖化現象によるものか、ここ10年位は河川流域の全てが凍ることは殆どなくなった。静内川だけが結氷しないのは、日高山脈の伏流水が川全域で沸くために、水温が下がらないからとされている。

このことは、越冬する他の冬鳥たちも恩恵を受けており、中でもオジロワシ、オオワシのワシ類はサケなどの魚類が主食であり、河川が結氷しないため、餌の確保が可能となり、これまでも数十羽が静内川河口で越冬している。

静内川上流には、水産庁のサケ・マスふ化場があり、早くからふ化事業が行われ、河口約1km地点の捕獲場で、毎年、9月から捕獲が行われ、春には稚魚が放流されていたが、平成4年秋から、人工ふ化に加え自然産卵の比率を高める事を目的に、捕獲場を河口1km地点から8km上流地点に移設させた。

これにより、サケの生息する面積が大幅に増加。1月頃まで狙上するサケや産卵後のサケが飛躍的に増す事となり、餌が増えた分だけ、ワシ・タカ類も増え、これまで10数羽であったものが、平成4年10月以降は40～50羽までに増えたが、近年は多くて20羽程度に減少している。

また、確認される個体は幼鳥が大部分ではあるが、従来はオジロワシしか生息しなかったものが、オジロとオオワシとが半数と、実質的にオオワシの生息数が増加することとなった。

えりも西海岸のハクチョウの越冬については、なぜ、海岸で生息するのかは正確には分かっていない。しかし、えりも地区には大きな河川がなく、ハクチョウの生息に適している水辺がないことと、必ずその海岸付近には大小の河川があり、真水が流れ込んでいるという事が分かっているが、静内川同様にサケが産卵のために回帰することに起因するものと思われる。

平成2年の秋頃から、静内川及び新冠川でハクチョウの嘴や足に、釣り針、重り、ハリスなどの魚釣用の仕掛けが絡み付くケースが多くなった。

両河川の河口とも、9～11月はサケ・マス捕獲禁漁期間となるが、それ以外の期間については、周年を通じてアカハラ（ウグイ）が多く生息し、絶好のポイントとなっているため、町内外からの釣り人が絶えない。しかし、放置した釣り糸などによるハクチョウの受難も多く、その都度、関係者などで対応している。

### (4) 餌（食物）

日高管内の河川中、ハクチョウたちが最も好みそうな沼に近い状態は新冠川で、水草も豊富。しかし、マコモ等の生えている川はないものの水質がきれいであるため、川岸や洲上には植物が豊富であり、川底には水草（藻）も多く、ハクチョウやカモ類がよく食している。

給餌が行われているのは、静内川、日高幌別川、様似川の3河川で、定期的に一定

数が供給されるものではなく大半が一般住民によるパン、えん麦や野菜くずなども提供されている。また、静内川でのハクチョウの知名度、人気はアメリカコハクチョウの渡来などの話題もあり、多くの町民が家族連れやお年寄りを中心にパンなどを与えており、その数は、一日に数百人を下らない。

過去、静内川での生息数が年々増加していったのは、この給餌の量が絶えることなく供給されていることに比例していると考えられる。

唯一、海岸の生息地域である、えりも西海岸では首を海中に突っ込み、海草を食している。海草の種類については、岩海苔と考えられる。

#### (5) 一日の行動

瓢湖、伊豆沼、中海など、本州の主なハクチョウ越冬地では、夜間は湖などの水辺をねぐらとし、夜明けと共に近辺の水田等へ移動し、夕方にまた、ねぐらに戻るといった行動をとることが普通であるが、日高地方では降雪と寒さのため、陸上から直接、落ち穂などの餌を採ることが難しいからか、ハクチョウが水田等で餌を食するといった光景は、少なくとも平成7年頃までは静内町内で確認された事がなかった。

しかし、平成8年以降になると年々、静内川近郊の水田、牧草地などで採食する個体が増え、特に年が明けて一月以降、牧草地で牧草の新芽を食することも多く、加えて静内川河口域に集中していたねぐらも近年は、中流域まで生息範囲が広がり、一極集中から広範囲での越冬となっている。

要因については、基幹産業である農業が競走馬生産であり周囲には牧草地が豊富であることもあるが、地球温暖化現象による気温の上昇により暖かくなり、採食が容易に可能となったことが一番の理由と考えられる。

更に平成17年1月から3月中旬まで、静内町市街地を流れる古川においてオオハクチョウ30羽が夜はねぐらの静内川へと移動するが、日中、生息することが確認された。

古川については昔から工場の廃液や家庭雑排水などが流れ込み、水質も良くなかったことからハクチョウの生息は考えられなかったが、近年、水質を綺麗にする住民活動も活発となり、その成果が出たかどうかは確認できていないが、水質改善が大きな理由と思われ、静内川と比較するとロケーションが沼に近く、水草も多いことからハクチョウが好む環境であることに間違いない。

特徴的なのはここで生息する群れの成鳥、幼鳥比率が他の地域から比較すると圧倒的に幼鳥が多く30羽の内、幼鳥は三分の一にあたる10羽と多い。幼鳥の越冬には水流も緩やかなことから静内川よりも生息に適しているものと思われる。

また、生息場所が川岸へと上がるための階段がある場所に限定されており、ここが休息をとるための上がり場として利用されているのも興味深い。その一部は、近づくに寄って来ることから人からの給餌にも慣れ、餌が確保出来きていると思われる。

また、静内川と新冠川（距離約7km）、日高幌別川と様似川（距離約8km）については、河川の結氷がないなど生息条件が整っている期間中は、ファミリー単位で、ひん

ぱんに互いの川を往来している。

#### (6) 種別

日高地方では、ハクチョウは他の北海道の越冬地と同じく、オオハクチョウのことを意味する。コハクチョウは、年間で数羽しか確認されず、コブハクチョウについては、確認されたことはない。

また、アメリカコハクチョウは、昭和63年1月から平成10年3月までの11年間、1羽が静内川を拠点として、管内の各河川で越冬したが、残念ながらそれ以降は確認されていない。(別項、アメリカコハクチョウ参照)

#### (7) 渡り

管内で越冬数が最も多い静内川では、過去のデータから初認の標準日を10月25日とし、春の渡りは、3月下旬を北帰行の基準日としていたが、近年は初認が10月20日前後に早まっている。

ルートについては2コースあり、一つは太平洋沿岸コース。もう一つは、日高山脈を横断するコースである。

この内、太平洋沿岸コースは、秋の渡りに多く見られ、えりも岬方面とウトナイ湖方面の二通りがあるが、いずれの場合も静内川河口から進入し、数回上空を旋回の後、水面に降りるといったパターンが多い。

また、3月になると海岸線(太平洋)の海上を、北方向に渡って行く群れや渡りの途中、海岸の砂浜で休んでいるハクチョウも時々見かける。種別は渡りのコースからして、コハクチョウと思われる。

反対に春の北帰行は、日高山脈を横断するケースが秋に比較し多くなる。数年前から、日高支庁と隣り合わせの十勝支庁管内十勝川(音更町など)に、2月中旬頃からオオハクチョウが渡りの中継点として集結する数が多くなったが、静内川と十勝川とは、道東への渡りコースの直線上にあり、距離的には、ほぼ中間に位置する。

渡る時間については、夜間もしくは、早朝に渡る場合が多い(町内では夜間と早朝、家の上を飛んで行くハクチョウの鳴き声を聞くという確認例が多い)。えりも町東洋(油駒)地区では、例年3月20日から26日までの一週間、ハクチョウ(オオハクかコハクかは不明)の群れがおおよそ10~20羽単位で、7~8時頃の早朝、上空を通過するのが観察されている。(陸路コース)一方、1986年頃から、新しいパターンが見られるようになった。場所は、静内川から約60km離れた平取町内の沙流川中流付近で、例年、3月20日頃になるとハクチョウが、水田で落ち穂などを食する。

1日に確認できる数は約200羽で、数日間位は滞在しているようである。種別は、オオハクが20%、コハクが80%とコハクチョウが多い。

滞在期間は、おおよそ3月中旬からの2週間程度で、時期については、その年の降雪量に関係するようで、残雪が残っているうちは、当然、餌を食することができないため、上空を通過するのであろうが降下せず、雪解けを待ってハクチョウたちも滞在

する。

これらのハクチョウたちのねぐらは、飛来して来る方向から推測すると、水田側の沙流川であったり、ウトナイ湖であったりするようで、基本的に本州地区の生態と同一とする。

(8) アメリカコハクチョウ越冬データ [昭和62年(1987)～平成10年(1998)]

●昭和62年～63年・1987～1988(146日間) / 日高管内1年目

○静内川……………62年11月6日、11月24日(2日間)

○日高幌別川…62年11月16日～63年4月9日(145日間)

○様似川……………63年2月5日～3月9日(32日間)

\*この年、日高管内初シーズンで静内川、幌別川と様似川を往来しているため、日高幌別川の日数は145日となっているが、この間、静内川、様似川で生息していた日も含んでいる。

\*様似川でまだ亜成鳥のアメコがオオハクチョウの成鳥によく追いかけられ、いじめられている光景を度々目にする。種類も違い体も小さいとなれば、仕方がないとは思いますが心が痛む。

\*この年、アメリカコハクチョウの北海道での越冬が初めて記録されることになったが、国内で数羽しか確認例がなく希少種のアメコが、オオハクしか越冬しない北海道で、しかもコハクの中継地ともなっていない日高地方になぜ渡来してきたのか不思議である。

●昭和63年～平成元年・1988～1989(125日間) / 日高管内2年目

○日高幌別川…11月11日～11月27日(16日間)

○静内川……………11月28日～12月29日(2日間)

○日高幌別川…11月30日～12月4日(5日間)

○静内川……………12月5日～12月7日(3日間)

○日高幌別川…12月8日～12月22日(15日間)

○静内川……………12月23日～3月4日(72日間)

○日高幌別川…3月4日～3月15日(12日間)

\*トータル 静内川……………(77日間)

日高幌別川…(48日間)

\*この年は、日高幌別川と静内川を行ったり来たりし、渡ってきた当初は、日高幌別川、その後は静内川、そして最後はまた、日高幌別川で越冬し、様似川では、観測されなかった。この事は、日高地方にはコハクが越冬せず近辺には仲間もなく、しかも、アメコがまだ2歳と思われ経験もないため越冬地をどこにするか、アメコがその場所を模索していることから行ったり来りの往来となったと考えられる。(各河川での滞在日数は上記の通りであるが、同日に、静内川と日高幌別川の二つの河川で確認された例もある)

\*日高幌別川は、市街地や人家から離れ、湿地沼である赤沼があるなど、自然豊か

な地形が残っており越冬するには好環境である。

\* 静内川での越冬日数が多くなったのは、いくつかの理由が考えられる。その一つは、冬でも静内川は日高管内では唯一、結氷しない河川であるため、天然の餌を採る事も可能であり、生息環境に恵まれている事が最大の理由。また、給餌体制が他のところと比べ、整っているため、いつでもある程度必要な給餌を受けることができ、越冬に最も必要条件である餌の確保ができる結果と推測される。

\* 静内川で初めて越冬したが、時々、オオハクチョウに突つかれるなど、追われながらの生活が続く。

\* この年は、暖冬のため、白鳥の渡っていくのが、いつもより早い。

\* 新聞などで紹介され、アメコもすっかりマチのスター。多くの町民が餌を持参、パンを主としたかなりの餌をアメコに提供している。

●平成元年～2年・1989～1990（148日間）／日高管内3年目

○日高幌別川…10月25日～11月25日（32日間）

○静内川………11月26日～2年3月5日、3月15日、18～19日（116日間）

\* この年の主な越冬地は、静内川となる。

\* 行動は、ほとんどが単独行動であるが、3年目の静内川での越冬のためすっかり落ち着いた感じの行動が目につく。昨年までのようにオオハクに追われ、いじめられる光景を見ることはまれで、逆にオオハクを追い払うなどの質禄が出てきた。

\* アメコは、相変わらず町民の人気者。よくパンなどの餌をもらい白鳥のなかでは、特別扱いで保護されているのが分かる。有り難い。

\* 12月中旬午前11時ごろ、静内川の中洲でアメコがオオハクチョウの上にあがろうと追いかける行動を目撃。松井先生に紹介するとそれは疑交尾と教えてくれた。このことも含め日頃の行動ぶりから、静内川のアメコはオスであることの可能性が強いと思われる。

\* 待望の「静内川白鳥広場」がついに完成。白鳥広場の設計にあたり、段差や手摺りを設けるなど、河川管理者の室蘭土木現業所に何点かを要望したが、ほぼ要求が通った（このような事は一昔前には考えられなかった）。これで白鳥と町民との触れ合いが深まる環境が整備されたことになり、大変嬉しい事だ。（工期／平成元年8月2日～12月17日）

●平成2年～3年・1990～1991（11日間）／日高管内4年目

○静内川…11月2日～11月6日、平成3年3月22日～26日、29日（11日間）

\* アメリカコハクチョウが、秋、春共に初めてコハクチョウとペアで渡来する。行動はいつも同じくしているが、動作、しぐさ、行動はアメコがいつもリーダー格であることから、アメコのほうがオスであるのはほぼ間違いないと思われる。

\* この年は、渡りの行き帰りに、静内川に立ち寄っただけであり、残念ながら日高地方での越冬は観測されず、日本白鳥の会を通じ、全国に照会をしたが、発見できず残念。本州の人里離れた無名の湖沼河川などで越冬地していたと推察される。（伊豆沼、北上川、瓢湖、猪苗代湖、中海など、日本白鳥の会の観測体制が整っている所に

は、姿を現わさず)

●平成3年～4年・1991～1992(28日間) / 日高管内5年目

○静内川…10月17日、10月23日～24日、平成4年3月21日～30日(13日間)

\*コハクチョウとペアでの渡来が期待されたが、残念ながら一羽で現れ、皆が待ち望んでいたファミリーの夢はならず非常に残念。また、渡り途中の秋と春、一時的に静内川に立ち寄っただけであり、今シーズンも日高地方でも越冬はしなかった。

\*外観を見た印象ではくちばしが良く発達した感じで、サイズが大きくなり凹凸もはっきりとしてきた。成鳥らしくなったという印象が強い。

\*10月下旬、静内川から姿を消したため、日高地方(静内、新冠、浦河等)を探しても姿を確認できず。しかし、日高管内のどこかにいるのではと思えてならないのであるが…。

\*3月21日午前10時頃、静内川に渡来。パンを与えるとよく食べる。人の姿を見ると直ぐやってくる。他の白鳥たちと比較し落ち着いての行動が目立ち、ホームグラウンド感覚で動き回っているのがよく分かる。

\*3月22日は終始、旅の疲れをとるためか顔を羽の中に入れ、中洲で寝ていることが多い。(なれた土地ゆえのゆとりの行動か)

\*この年は、渡りがいつもより2週間早い。

○様似川…平成4年3月19日～21日(3日間)

\*金子さんから電話有り、19日午後6時頃に浦河方向から河口に飛んできたとのこと。20日に様似川に毛利さんの奥さんと一緒に行き、アメコを確認、毎年渡来してくる個体と同一である事も併せて確認。様似川には4年ぶりの渡来、金子さん、馬場さんとも合う。21日午前8時まで様似川にいるのを馬場さんが確認。

○新冠川…平成4年4月1日～13日(13日間)

\*今年は、初めて静内川から新冠川に帰り道に寄る。結局、新冠川には13日の間滞在する。静内川から新冠川に移った理由は分からないが、新冠川には7羽の白鳥がこの間おり、地形的に沼状の川であるため水草があるのと、ここでも毎日の給餌が行われているため、餌には不自由しないため生息するには条件が整っている(静内川には、4月以降はこの年は白鳥の姿は見えない)。しかし、周辺には、アカハラ釣りの釣人が多く、釣人が我がもの顔で川の中に入る度に、白鳥たちも警戒して移動するなど、環境的には良くはなく事故が起きなければとの感が強い。13日にオオハク7羽と一緒に北へ旅立つ。

●平成4年～5年・1992～1993(148日間) / 日高管内6年目

○静内川…平成4年10月17日・20日、10月23日～平成5年3月19日(148日間)

\*毛利さんが今朝8時頃、一羽の白鳥を見つけたが、左岸にいたためアメコとは判別つかず、午前11時になり、呼ぶと右岸に近付きアメコと確認。パンを1枚食べては中洲に行き、また、食べては中洲に行くに行った感じ。長旅のせいか、盛んに羽繕いをしている。水を飲むしぐさがいつものアメコと同じで、懐かしいような、ほっとするような感がする。毛利さんが声を出



すと近寄りパンを食べた。ハクチョウには人の声が分かる位の知能があると思う。

\*今年見たアメコの特徴は、額の上あたりが一部分茶色に染まっており、夏を過ごした土地が、鉄分が多い場所だったと思われる。また、嘴の幅が大きく、長く、凹凸が深くなっており、毎年、来る年度にその感が強くなるが、今年はとくに変化が大きいように思われる。アメコの顔を見ていると成長したというか、個体としての年輪みたいなものを感じる。それにしても番とファミリーへの期待が外れ、残念というより、可哀想だ。なんとか、家族ができないものかと思う。(10月17日)

\*10月17日、アメコが単独で渡来以来の行動。18～19日は姿が見えなかったが、20日は確認。21～22日は再び見えず、23日以降は平成5年3月19日まで確認する。

\*10月25日にコハクが渡来。以後、平成5年3月19日までアメコと滞在。アメコとつがいの可能性があるが、静内川での行動ぶりを見ていると、別々の行動が多く、残念ながらつがいではないように思える。しかし、静内川で越冬しないコハクがなぜ生息するのか不思議である。(平成2年につがい時は、2羽は片時も離れず)しかし、この冬、平成元年から3年振りに静内川で越冬。

●平成5年～6年・1993～1994(3日間) / 日高管内7年目

○静内川…平成6年3月8日、16日(2日間)

○向別川…平成6年3月12日(1日間)

\*平成5年11月、この3月まで行動を共にしていたコハクが渡来、アメコの姿は確認できず残念。日高に渡来にして6年、そして、静内町に渡来して5年。コハクの平均寿命は6～7年というが、アメコはもう死んでしまったのだろうか。なんとか無事で、そしてファミリーで元気な姿をもう一度、見せて欲しいものだ。

\*2月19日～20日、日本白鳥の会の全国現地研修会を静内町で開催したが、期間中、主役のアメコの姿は見えず残念であった。

\*3月8日、高木さんから午後4時頃、アメコがいると連絡有り。アメコ、コハク、そして、その子と思われるファミリーの3羽。アメコとは、実に一年振りの再会となった。もう死亡したのかとも思ったが、もしやという希望もあったので、理屈抜きに嬉しい。しかも、念願のファミリーともなれば、喜びも倍増である。

\*午前10時頃から静内川に来ていたようだ。毛利さんの差し出すパンをアメコだけは食べにきたが、コハクと幼鳥は、慣れていないため白鳥ふれあい広場には近付いてくれなかったようだ。残念なことに、夕刻からの悪天候と夕暮れで、観察が良くできない。写真とビデオを撮るが、どれも不鮮明。

\*3月16日、再びファミリーで静内川にいるのを高木さんが確認。

\*3月16日以降、早朝から静内川で観察するが、姿見えず。この冬の静内川への渡来は、たった2日となったが、これまでの間、どこで越冬をしていたかは全く不明。コハク生息条件に適した本州の中部以南で越冬したものと推測される。

\*念じていたファミリーでの渡来は、今年の秋以降の観察につながる事であり、幼鳥の成長も含めて非常に楽しみな出来事であった。

★青森県青森市野内川…平成6年3月6日～7日(2日間)

\*アメコが、3月6日～7日、青森市野内川の野内橋上流側で羽を休めていたのが確認された。県内でアメリカコハクチョウが渡来したのは初めてという旨の新聞記事（東奥日報・3月8日）が、岩手県北上市の村瀬美江さんから送られてきた。静内川に渡来するアメコでは、というご配慮であったが、嘴のパターンから同一の個体と分かった。

\*村瀬さんの話によると、アメコは、コハクと幼鳥の3羽で、2日間だけ、野内川に立ち寄ったという。3月8日には静内川に渡来しており、初めて静内川のアメコの北帰行のコースの一つが判明した。（3月17日）

★北海道浦河町向別川…平成6年3月12日（1日間）

\*アメコファミリー3羽（アメコ、コハク、幼鳥）が向別川で、少なくともこの日と前後数日、滞在したのを今日、浦河町の佐藤静男さんご夫婦とお話し確認する。見せて戴いた写真には平成6年3月12日の日付が在り、あのアメコファミリー3羽が間違いなく写っていた。幼鳥の写真を見るにつけ、半年余りの寿命だったのかと考えると心が痛み、暫く、写真の幼鳥を見続けた。

●平成6年～平成7年／1994～1995（61日間）／日高管内8年間

○静内川……………平成6年10月31日～11月7日、11月13日～27日

平成7年1月14日～28日（38日間）

○日高幌別川…平成7年2月1日～12日（12日間）

○向別川……………平成7年3月6日～16日（11日間）

\*10月31日、アメコを発見。今回は春に来た番と一緒にとの来町であるが、残念な事に幼鳥の姿は見えぬ。いつも3羽で行動していることから春にやって来たファミリーの3羽かと期待を持たせたものの、嘴のパターンを確認した結果、幼鳥は、春に来たものとは違うことが判明。

\*白鳥の幼鳥の渡り時の生存率は、データによれば50%と言われていることから今春の渡りの際、悪天候等のアクシデントに遭遇、死亡した可能性が強い。今回は姿を見せれば、町民から愛称を一般公募しようとしていたのに残念。

\*心配なのはアメコが歩行の際、左足を引きづっていること。怪我なのか病気なのか、原因ははっきりしないが、大事でなければ良いのだか。それにしても、何となく辛そうで、心が痛む。

\*アメコの生態を主としたNHK・TV「ふるさと発見」（全国放送）のロケがたまたま11月1日、静内川で予定されていたが、奇跡というべきか、収録日の前日に、何かを知っていたかのように静内川にやって来て、ビデオに収まってくれた。

\*コハクの越冬地でない北海道、それも静内町にアメコがやって来て、しかも、前年秋は一度も、姿を見せたことのないアメコが、収録の全日にきちんとやって来るとは…。アメコの元気な姿を全国の人に見て欲しいと思っていただけに嬉しかった。それにしても、この白鳥には不思議な縁を感じていたが、こんな体験をすると理屈で言い切れない運命的なものを改めて感じる。（11月1日）

\*今年のアメコは、幼鳥期のようなオオハクによくいじめに遭ったような、ひ弱さ

は全く見えず、実にたくましい印象を受ける。連れ合いを同伴しての越冬の性も有るのだろうが、家長としての質禄を見ることが出来、嬉しいものがある。(11月27日)

\*暫く姿が見えなかったアメコ、中洲で発見。河口は、吹雪き交りの寒さ

で大方の白鳥が頭を羽の中に入れ休んでいたが、その中にアメコがおり突然、嘴を上げこちらを見た。アメコがここにいるよと合図をしてくれたように思えた。いつもながらアメコとは、不思議な縁を感じる。

(平成7年1月15日)

\*天気は快晴。日高幌別川でアメコペアを確認。仲良く生活しているのを見る事が出来き、なぜ、静内に来ないのとアメコに呟くも、当然の事ながらアメコは知らないふり。しかし、元気な様子を確認出来ただけでも、往復2時間かけて浦河に来たかいたがあった。野鳥の世界はいつも、こううまくいくとは限らない。おおよそ、無駄骨で終わるといのが常識であるからだ。(2月12日)

\*静内川、日高幌別川、様似川とこれまでの渡来地の3町を訪れるも、アメコペアの姿は確認できず。一体、どこに居るのだろうか。考えて見れば、相手は自然界の野生動物。しかも4,000キロも離れた北極海から日本の北海道に渡って来る野鳥である。別に静内町に居ようが、浦河に居ようが、様似町に居ようが、それは僅か数十キロの範囲。しかし、アメコとはもう7~8年の付き合いだ。分かっているのだが私には簡単には割り切れない。(3月5日)

\*残念ながら、静内川から姿を消したアメコペアは、平成7年の1月中旬以降、浦河町に生息地を移し、日高幌別川、向別川、その他周辺の河川で越冬した様子。2月12日には、浦河町の日高幌別川にペアでいるのを確認したが、浦河町の春田さん、小山さん。様似町の金子さんに聞くと3月下旬まで、浦河町の各河川を移動していたようであるが、正確な記録がないので生息記録に入れる事が出来ずに残念。(3月30日)

●平成7年~平成8年/1995~1996(19日間)/日高管内9年目

○静内川……………平成7年11月7日、

平成8年4月9日(2日間)

○向別川……………平成7年11月8日~14日(7日間)

○向別川……………平成8年4月5日~7日(3日間)

○赤沼……………平成8年10月20日~26日(7日間)

\*浦河の佐藤氏から電話があり、アメコが静内川に来ているという。すぐ出掛け、約半年振りのアメコペアと再会となった。

\*今日、来たばかりなのかペア共々、オオハクに時折、追われるシーンもあり、まだ、静内川では落ち着かないといったところ。ペアは今年の春に連れ添った個体と同じであるが、今年も幼鳥の姿を見ることが出来ずに残念。来年に期待したいがアメコの年齢を考える相当不安になる。後は一日でも長く元気な姿を見れることと静内で越冬して欲しいという願いしかない。

\*日本白鳥の会・松井会長に、第一報を入れる。いつものように「来ましたか、それは良かった」と、我が事のように喜んでいただいた。また、幼鳥での渡来について

は、まだ、可能性がないとは言えないと教えて頂き、嬉しくなったが、確立はかなり低いかと思われる。

\*浦河町、様似町の野鳥仲間に静内川に渡来した事、今後の静内町以外での観察を依頼。

\*今年は、ハクチョウの渡来が極端に遅い。例年の初飛来日は、10月15日が標準なのに今年は、10月26日となった。それも、半日後にはいなくなり、集団でのまとまった渡来日は、なんと11月6日という遅い結果となった。少なくとも例年より、渡りは半月は遅れており、こんなに遅い年は、ここ10年では初めての事である。地球規模の温暖化が更に進んだ結果なのか、余程、シベリアが暖かったのだろう。(11月7日)

\*通常、北海道では越冬しないコハクチョウ(アメコ)が、静内町を含めた日高地方になぜ来るのかという疑問については次の理由が考えられる。

①日高管内は、北海道でも最も温暖な地域で気温もあまり下がらず、気候や環境が本州に近い。

②日高管内の河川は結氷することが少なく、また結氷しても長い期間とはならないため川の水草、川底の藻などの天然の餌が容易に確保でき、同時にねぐらの確保が可能。

③静内川では、人工給餌による餌が確保できる。(アメリカコハクチョウが越冬していた年代は定期的な給餌が行われていた)

④自然が豊かであるため、静内川以外の河川でも、餌の確保ができる等生息するのに十分な環境が整っている。

\*今までのデータでは単独で渡来した場合、上記の通りとなるが、ペアでの渡来については、日高地方で長期間にわたり越冬はしたことがない。単独渡来の場合には北海道で越冬するが、ペア及びファミリーでの渡来の場合、本州での越冬となるのはなぜなのか分からない。(11月11日)

\*4月6日、突然、浦河町・春田さんからの電話。アメコが向別川に来ているという。早速、現地へ出掛け確認する。間違いなくアメコペア2羽であり、4か月振りの再会となった。アメコペアの他には、コハク1羽、オオハク13羽の計16羽がおり、時折、来訪者の差し出すパンを食べている。それにしても、今年は随分と遅い日高地方への渡来となった。

\*今回の情報は、向別川の国道に架かる橋のもとに住む佐藤さんの家族が発信源でありこれまでも、コハクなどハクチョウに給餌などを随分と長く続けてきたと聞いた。

\*平成6年3月、アメコファミリー3羽が日高へ渡来して来た際も、3月12日にアメコ、コハク、幼鳥の3羽で向別川に来ており、ご主人が写真に撮っている。写真を見せてもらうが3月12日という日付がはっきりと写っており、幼鳥の姿を見るにつけ溜め息が出てくる。

\*野生動物が、厳しい自然界の中でいかに生活を続ける事が、困難なのか、そして体力や生きる知識が劣る幼鳥たちにとり、いかに大変なのかを伺い知る事が出来る例

と思われる。また、平成7年秋は、最低11月8日～14日までの一週間、向別川に滞在していた事が佐藤さんとの取材で判明する。佐藤さんの話では、不思議な事に向別川からいなくなるのは毎年、4月21日と決まっているという。

\*向別川で、6～7年前からアメコの観察を続けていた佐藤静男さん（佐藤スポーツ店）の存在を今日、初めて知った。

\*平成8年4月5日～4月6日までの間も向別川にいたとの事。今日4月6日、向別川でオオハク13羽、コハク1羽の群れと生息するアメコペアを確認、ビデオと写真に記録する。

\*平成8年春のアメコの印象は次のとおり。

①年々、嘴が随分と長くなってきた。逆光時のシルエットを眺めていると特にその感がする。また、嘴の鼻孔が随分と大きくなった感がする。時の推移と同時に移行するものであろう。

②嘴パターンの黄色部分が左側に比べ、右側面積の方が大きい事。これまでは、左右面積はほぼ同一で、余り変わらなかったように思う。

③昨年、足を引きずっていた右足は、今日の観察では“びっこ”を引いてはおらず、完治したものと思われ一安心。

④ペアであるコハクや回りのオオハクと比較（観察）すると、アメコ歩行動作等はゆったりとしており、それなりの年齢を考えさせられる。

⑤まだ、向別川に渡来したばかりという事もあり今日は給餌時等、オオハクに追われる光景が目立ち心が痛む。

⑥向別川は、川幅も狭く水草も豊富でもなく、なおかつ地理的にも市街地のど真ん中に位置するなど、決して優れた環境とは言えず。そんな所でなぜ、生息するのか疑問はつもの。（4月7日）

\*永井秀夫さんが、アメコが4月9日、早朝7時頃、静内川にいたと、日付入りの写真を提供してくれる。翌日にはもう姿を見る事が出来なかったという。写真を見ると紛れもなくアメコとコハクのペアであった。（4月26日）

●平成8年～平成9年／1996～1997（154日間）／日高管内10シーズン目

○浦河町・赤沼……………平成8年10月20日～26日（7日間）

○静内川……………平成8年10月27日～28日、11月5日～6日（4日間）

○浦河町・向別川……………平成8年10月29日～30日、11月3日～4日、11月7日～12月31日

平成9年1月1日～3月29日（この間、10日間程度不在あり。元浦川などに移動する／137日間）

○浦河町・日高幌別川…平成8年12月4日～6日（3日間）

○浦河町・元浦川……………平成9年1月16日、24日、30日（3日間）

\*アメコが10月20日から浦河町赤沼（日高幌別川河口付近）に渡来していると春田さんから情報が有り。10月23日はオオハク9羽、コハク1羽を確認したとの事で以上全てが成鳥。

\*アメコを今日は午前中、浦河町～赤沼・日高幌別川・向別川・元浦川、様似町～様似川、三石町～三石川などを探索するも発見できずに残念。しかし、帰り道に念の為、静内川をチェックすると元気で羽繕中のアメコを発見。

\*10月27日～静内川でのアメコ観察記録。

①アメコが今春までの数年間、ペアとしての越冬生活が続いた。今秋、静内川にはコハクチョウが4羽もおり、その内の1羽位はアメコとの番の可能性が十分、可能性ありと考えられたが、残念ながら単独での渡来となった。

②今春4月のビデオでチェックするが、やはり番の相手とは相違し、今秋渡来は、単独での渡りとの結論に達する。

③それにしても日高に来るアメコは、どうしてこうもペア運が悪いのか。今年の春と一緒に居たあのペアは一体どこに行ったのかと思案する。

④嘴右側、黄色のパターン面積が、左側パターンと比較し、面積割合が大きいという事が、この度、とくに顕著に印象強い。

⑤嘴トランペット部分が、更に長くなったという感の印象が改めて強い。

⑥今日のハクチョウ数は23羽。オオハク～18羽。コハク～4羽。アメコ～1羽。

⑦アメコと行動を共にするコハクが2羽おり（多分ペアと思われる）この3羽の共通点は共に首、胴体の半分が赤茶けている。つまり、今夏、シベリアでの繁殖場所が鉄分の多い場所であったという証し。

\*秋は、残念ながら単独での渡来となったが、今まで単独での渡来するパターンは、日高地方で越冬するケースが多かった事から、今年は北海道での越冬の可能性が高い。（10月27日）

\*毎日新聞北海道支社・報道部写真課長・鈴木實氏から、浦河町向別川で11月3日、銃の発砲事件が有り、アメコがいなくなったとの電話が有り、早速、浦河町・佐藤さんに電話する。息子さんが出て『11月3日、午前8時頃から午後4時頃までの間、5～6回の発砲があった。ハンターは、見たことのない人でどこの誰かも、分からない。発砲は対岸から有り、カモ10羽が当日の収穫であった。しかし、アメコには銃口は向けられなかった』という。

\*11月2日～4日まで、私が都合で静内町にいないため毛利さんに確認するが11月5日から今日まで（6日）静内川にいたとの事（11月6日）

\*本日、浦河町・佐藤さんに寄る機会があり次の情報を手に入れる。

①今日、アメコが午前9時30分頃、渡来したとの事で安堵する。3日の発砲は、向別川左岸から海面及び右岸方向に向けてのものであり、2時間置きに5～6回程度のものであった。

②向別川には、午前中にやって来て、夜半になるとねぐらとしている何処かへ行ってしまふとの事。ねぐらは赤沼か日高幌別川と思われる。

③今までの向別川への渡来は、10月29日～30日、11月3日～4日、11月7日。

④ねぐらとして、向別川を選ばない主な理由は、暇なしにキタキツネがこの辺に現れるという。天敵がいるとなれば当然のことながらねぐらには適さず。

⑤ハンターは帰路、苫小牧方向に向け車を走らせたというのが地元のハンターではなく町外の者と思われる。(11月7日)

\* 静内川に7年の歳月と12億5600万円を投じて工事が行われた全道一長い歩道橋「シベチャリの橋」が完成し、平成8年11月13日に渡橋式が行われた。ちなみに全長347.2 m、照明は60通りが可能で午後9時まで点灯する。

\* 6～7年前、この歩道橋の設計にあたり、ハクチョウなど野鳥に与える環境アセスメントのため、コンサルタントに野鳥生態と橋が与える影響などをアドバイスした。誠意のあるコンサルタントで、何度も自分の提言、アドバイスを真剣に聞いてくれ、その結果、昼・夜を問わず、歩道橋を往来する野鳥たちにとり、極力、障害となる面積が少ない証明設備や欄干などを設計して頂き、有り難いと思っている。(工期・平成2年度～平成8年度)(11月13日)

\* 岩手県北上市・村瀬美恵さんの話では、アメコは流れがある所は好まず、川よりも池や沼を好むと福島県の八木さんが言っていたというのが、今シーズン向別川にアメコが固執していた理由が分かった気がした。というのも、日高管内では赤沼のような自然豊かな沼地が、アメコが最も好む越冬地である言う事。だから、発砲事件が有った後であっても、ここを拠点として生息し、向別川にも昼間に顔を出すと思われる(11月16日)

\* 今シーズン、静内川でのハクチョウ越冬の印象は、シベチャリの橋が出来たせいか、いつも渡来するファミリー数組みが、今シーズンは姿を見せなかったなど、全体行動がなんとなく落ち着きがなかった。

\* アメコのここ数年春、浦河町・向別川での北帰行の旅立ち日は、平成6年から平成8年までの3年間、不思議なことに4月21日の早朝(7時30分頃)と決まっていたが、今年は、約1か月早く3月29日となった。理由は、いつにない暖冬と単身での渡来と思われる。

\* 3月29日、旅立ち夕方日高山脈の尾根にまっしぐらに向かって飛び立った。例年、旅立ち日高山脈に向かい飛び立って行く。推測するに、アメコの北帰行コースは日高山脈越えて十勝支庁管内へと進み、音更町などの十勝川河口へと渡りそこから浜頓別町・クッチャロ湖へ移動した後、ロシア・チュコト半島付近へと渡ると考えられる。

\* 荻伏・元浦川での行動は、国道の橋近くの中洲にいる事が多い。

\* 外気が下がる2月、1日～20日頃までは向別川河口付近は川が結氷するため、ねぐらを結氷がない元浦川に移動する。午前中はそのまま滞在し、午後から佐藤さんなどからの給餌を求め、向別川にやって来るといったパターン。

\* 毎年、日高地方に来るアメコとは別に、向別川へ数年前から来るアメコファミリーがおり今年も3月上旬に渡来、数日間ではあるが生息した。

●平成9年～平成10年/1997～1998(180日間) /日高管内11シーズン目

○浦河町・向別川……………平成9年10月23日～平成10年1月7日、2月14日～4月20日(143日間)

○浦河町・日高幌別川…平成10年1月8日～2月13日（37日間）

\*浦河町内で（向別川・日高幌別川）、過去最高の180日間にわたり越冬。

\*10月23日午後3時に、アメコが向別川にきたと佐藤さんから連絡ある。

\*10月25日～向別川でのアメコ観察で浦河に着くと、天候もよくなり陽がさす。記録用のビデオと写真を撮るが、最高の気象条件。アメコも、私の都合や目的を見透かしたかのように呼応し、次々とポーズを取ってくれた。時にアメコには、不思議な体験をさせていただく事があるが、今日も自分とアメコの“何かを”感じた。（結局、これが最後の本格的な写真撮影となった）

①外見の印象は、嘴の特徴が目立つ。具体的には、嘴が大きく発達し、首が長くなった。特に、嘴パターンの黄色部分面積が大きくなった印象を受ける。また、凹凸が大きくなり、鼻孔が大きくなった。これらは、ここ数年間続いており、今年もその延長線上の特徴。

②渡りの直後で、エネルギーを使い果たした性か、首回りなどが細くなりやせた印象がする。また、加齢であるため各部分の羽根に弾力がなく水に濡れてもそのままの羽根が寝ている状態。

③当然の事ながら、アメコは佐藤さんの存在を認識することが可能で、佐藤さんも『クロ、クロ』とアメコを可愛がっている。

④今年も、残念ながらシングルでの渡来となり、番でファミリーという願いは果たせずに残念である。

⑤浦河町の日高幌別川、赤沼を調査するも、今シーズンはまだオオハクチョウの姿を確認できず。

⑥元浦川は、水底に水草が生えていないものの川の流れも緩く、沼のような水の状態で、アメコが好む環境である。（10月25日）

\*3月22日～向別川での観察。向別橋付近ではなく、河口部の流れの緩やかな所でオオハクチョウ11羽、コハクチョウ1羽と一緒に生息。水面に浮かんだり、砂浜で羽繕いをしたり、また、群れで何度か空中へも舞い上がる。最近橋付近には朝・夕のパン給餌時しか近寄らないという。佐藤さんに話では今年越冬の特徴は次のとおり。

①アメコが渡来したのは10月23日ではあるが、他のオオハクチョウたちが来たのは、それから2週間後。

②1月8日～2月13日まで向別川が結氷（今年は10年振りの寒波襲来で気温の低い年）し、生息地を日高幌別川へと移す。その間、朝・夕時のみ向別川へと移動し、佐藤さんからパンの給餌を受けるという生活パターンが続く。

③2月14日からは解氷、一日中、向別川で生息するようになる。しかし、橋付近だけでなく、オオハクチョウ数十羽がいる太平洋近くの河口部で生息する事が多い。理由は、川の全面が解氷しておらず、市街地に近い事から車や人の往来も多く、飼い犬やキタキツネなどの天敵もいるため、危険な要素が多い事による。

④佐藤さんに給餌は、他のオオハクチョウより、体が最も小さなアメコが一番食欲がある。